

平成11年度



稲作情報

会津版
第5号

平成11年7月23日

「ふくしま新世紀農業・農村確立運動」県推進本部

発行：福島県の米稲作情報編集会議
編集：福島県農業試験場会津支場

基本技術を励行し、安定多収・良質良食味の会津産米の更なる向上を図ろう

1 カ月予報（7月16日仙台管区気象台発表）

7月24日～7月30日：太平洋高気圧に覆われ、平年同様晴れの日が多いですが、大気の状態は不安定でしょう。平均気温は平年並みの見込みです。

7月31日～8月13日：太平洋高気圧に覆われ、平年同様晴れの日が多いでしょう。平均気温は平年並の見込みです。

移植栽培の当面する技術対策のポイント

いもち病防除と水管理の徹底で高品質米を生産しよう！！

1 生育状況

(1) 試験場内の生育：草丈は平坦部、高冷地とも平年よりやや短い。茎数は平坦部のコシヒカリはやや少ないが、他品種は平坦部、高冷地とも平年より多目である。葉色は、ほぼ平年並である。(表1)。幼穂形成始期は平坦部は2～3日遅れ、高冷地はほぼ平年並である。

(2) 現地の生育：草丈は並～やや短く、茎数は並～やや多い。コシヒカリはつなぎ肥の施用田も多い。

2 今後の生育予想

減数分裂期、出穂期は表3の様に予想される。平坦部の稈長は今後の気温が平年並であれば、平年並からやや短いと予測される(表2)。現地の出穂期は、ほぼ平年並と予想される。

3 当面の技術対策

(1) いもち病防除 **葉いもち**は全域で確認されている。7月3～4半旬に好適感染日が多いので**上位葉での発病が心配される(表4)。**

穂いもち防除に粒剤を用いる場合は、出穂10～20日前までに湛水状態で施用する。

散布剤での穂いもち防除は、穂ばらみ末期と穂揃期の防除を基本とし、多発が予想される場合は傾穂期の防除を追加する。

既に葉いもちの発生が見られるほ場では散布剤での防除を徹底し、上位葉の発病を防ぐ。穂いもち予防粒剤を施用したほ場や、航空防除を実施した場合でも、上位葉に葉いもちの病斑が見られる場合は、散布剤での防除を追加する。

(2) 追肥 コシヒカリの穂肥は生育量と葉色の診断により行う(第4号参照)。出穂前15日までカラスケール値で3.0を維持できないと予想される時は、早めの穂肥で対応する。また穂肥を施用する場合は、併せて葉いもち、穂いもちの防除を行う。

出穂期以降の追肥は、穂いもちの増加や食味の低下を招くので施用しない。

(3) 水管理 根の健全化と作土の固さを保つため、出穂後30日間は間断灌漑を継続する。減数分裂期の最低気温が17℃以下になると予想される時は、15cm以上の深水管理により幼穂を保護する。

(4) その他の病害虫防除 カメムシ類の常発地や前年多発した地域では、畦畔の雑草を出穂10日前までに刈取り、防除基準に従い適期に防除する。

紋枯病や稲こうじ病の常発地では防除基準に従い防除する。

湛水直播栽培の当面する技術対策のポイント

施肥、防除を適期に！！水管理を徹底し倒伏防止を！！

1 生育状況

株間やほ場による出穂のバラツキは大きいと予想されるが、4月下旬～5月上旬播きの直播水稻の出穂期は、作況試験（中苗・5月20日植）より3～4日程度の遅れと予想される。

2 当面の技術対策

- (1) いもち病 防除 いもち病防除は移植栽培と同様の体系で行うが、穂いもち防除を行う場合には生育ステージを確認し、適期に防除する。
- (2) 穂肥 穂肥施用は移植栽培に準じた診断基準で行う。移植栽培より倒伏し易いので時期と量を慎重に判断する。ほ場が軟弱な場合は特に注意する。
- (3) 水管理 直播ほ場は、移植ほ場よりも中干し時期が遅く雨が多かったため、中干しが不十分なほ場が多い。幼穂形成期以降は間断灌漑とするが、入水から入水までの間隔を移植ほ場よりも長目にして作土を固める。
- (4) 害虫防除 生育の遅れているほ場や葉色が濃いほ場では、イネツトムシの発生に注意し、発生を確認した場合は早急に防除する。

具体的なデータ

表1 7月19日の生育状況（作況試験・中苗・5月20日植）

会津支場（平坦地）					冷 試（高冷地）				
品 種	年次	草丈 (cm)	茎数 (本/m ²)	葉数 (枚)	葉色 (SPAD)	品 種	年次	草丈 (cm)	茎数 (本/m ²)
ひとめぼれ	本年	68.1	784	11.8	37.7	まい	本年	58.5	669
	前年	71.4	716	11.7	34.9	ひめ	前年	67.6	607
	平年	75.4	734	11.8	38.6		平年	65.6	608
	平年比・差	90	107	0.0	-0.9		平年比・差	89	110
コシヒカリ	本年	68.6	597	11.2	33.7	初星	本年	59.8	734
	前年	76.3	562	11.8	31.9		前年	67.1	752
	平年	78.6	665	11.7	34.8		平年	64.9	662
	平年比・差	87	90	-0.5	-1.1		平年比・差	92	111

表2 稈長及びm²当り粒数の予測

品 種	稈長 (cm)	m ² 当り粒数 (×100)
ひとめぼれ	85	360
コシヒカリ	87	314
コシヒカリ1	88	330

作況試験の幼穂形成期期のデータから予測。
コシヒカリ1は幼穂形成期の茎数を平年並とした場合の予測値

表3 幼穂形成始期と減数分裂期・出穂期の予想(月・日)

品 種	幼穂形成始期		減数分裂期	出穂期	
	本年	平年		本年	平年
会津ササニシキ	7.10	7.9	(7.19～7.24)	(8.3)	8.2
支 ひとめぼれ	7.14	7.12	(7.23～7.28)	(8.7)	8.4
場 コシヒカリ	7.14	7.12	(7.23～7.28)	(8.7)	8.5
冷 まいひめ	7.21	7.19	(7.30～8.4)	(8.14)	8.11
試 初 星	7.11	7.10	(7.20～7.25)	(8.4)	8.4
	7.15	7.15	(7.26～7.31)	(8.10)	8.10

表4 BLASTAMによるいもち感染好適日

月・日	7.13	14	15	16	17	18	19	20
喜多方	-	-	-	-	-	-	-	-
西会津	-	-	-	-	-	-	-	-
猪苗代	-	-	-	-	-	-	-	-
金 山	-	-	-	-	-	-	-	-
若 松	-	-	-	-	-	-	-	-
只 見	-	-	-	-	-	-	-	-
南 郷	-	-	-	-	-	-	-	-
田 島	-	-	-	-	-	-	-	-

は好適感染日、 は準好適感染日
は感染可能日、 - は感染不適日

大豆・ソバ栽培の技術対策のポイント

(1)大豆

湿害対策：葉の黄化、生育抑制等の湿害症状が見られる場合は、排水に努め、ほ場が乾き次第硫安、尿素等の即効性肥料を追肥する。施肥量は10a当たり成分で3～4kgとする。

追 肥 コーティング尿素的追肥を行わなかった場合は、尿素、硫安を用い、開花期～開花後10日頃までに行う。窒素成分で10a当たり6kgを株元に施用する。葉上からの散布は葉やけをおこす。

病虫害 紫斑病の薬剤防除は開花後20日～40日頃に行う。マメシクイガと同時防除を行うと効率的である。カメムシ類は高温年は多発するので注意する（防除の詳細は防除基準を参照）。

(2)ソバ

排水対策 ソバは湿害には極めて弱い。特に、転換畑では明渠による排水対策を万全に行う。

施 肥 ソバの10a当りの標準施肥量は窒素1.0～2.0kg、りん酸2.5～5.0kg、カリ2.5kgである。開発畑や火山灰土壌では石灰資材や燐酸資材も同時に投入する。